



弟子の掟⑥

シリーズ～弟子道～

2011/8/7

平和記念礼拝

マタイ福音書5章43-48節

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。

だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」



ローマ帝国への憎悪

○『隣人を愛し、敵を憎め』

- 「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」<レビ記19:18>
- 「敵を憎め」という掟は聖書にはないが、口伝律法の一部と思われる

○当時の最大の敵はローマ帝国

- 彼らの祖国を支配し、搾取し、蹂躪した
- メシアは敵を倒すために現れるはずだった

●●● | 驚きの掟！「敵を愛しなさい」

- 敵を好きになることではない
 - 敵である事実は変わらない
- 敵に対しても、隣人のように行動すること
 - 敵も味方も分け隔て無く親切にする
 - 「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。」<ローマ12:21>
- 敵のために祈る
 - 「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」<ステファノノ使徒7:60>

ウェイド・ボグスの証し (メジャーリーガー)

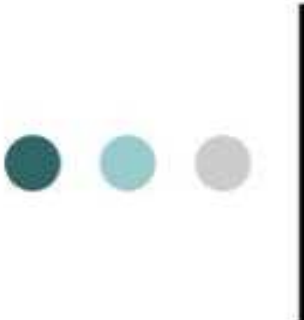
ボストン・レッドソックスの3塁手だったボグスは、敵地ヤンキース・スタジアムでプレーするのが嫌いだっただけでなく、一人の熱狂的なヤンキースファンがいたからである。そのヤンキースファンは、いつもネット裏の席に陣取り、ボグスに強烈なヤジを飛ばし、不愉快な思いをさせられていたからである。クリスチャンになったばかりだったボグスは困り果て、「主よ、こんな状況をどうしたらよいのでしょうか？」と祈った。

ある日、試合前の練習をしていると、そのファンがいつものように汚い言葉でボグスをヤジってきた。ボグスはもうこれ以上我慢できないと思い、彼に近づき、「あなたがいつも私をヤジっている人か？」と聞いた。彼は「ああ、そうだ。だからどうだって言うんだ！」とけんか腰に答えた。

ボグスは、ポケットから新しいボールを取り出し、サインを書いて彼に投げ渡した。それ以来、彼は二度とボグスをヤジることとはなく、ボグスの熱烈なファンになったということである。

なぜ敵を愛するのか

- 天の父の子となるため
 - 天の父は善人にも悪人にも太陽を昇らせ、雨を降らせて下さる
- 天の父に報いられるため
 - 自分を愛してくれる人を愛するのは当然のこと。徴税人も異邦人も同じことをする
- 天の父のように完全になるため
 - 敵を愛することは最も難しいことである



平和をもたらす至高の掟

- この世の人間同士が争っているのだから、この世のルールでは解決できない
- 「敵を愛する」という掟は、この世のルールではない！ 神の国のルールである
 - 天の父を基準にしたルールである
- イエス様の弟子は、神の国のルールに従う

コーリー・テン・ブームの証し

第二次世界大戦中、妹のベッツィーと共にドイツの強制収容所に入れられ、妹はそこで亡くなった。解放された後、ブームが恐れていたのは、収容所にいたナチの兵士に会うことだった。

伝道者となったブームが、ムニヒという町で説教をし、最後に決心者を募ったとき、彼女の恐れていたことが起こった。収容所にいた兵士の一人が講壇に近づき、彼女に「先生、あなたの赦しのメッセージを感謝します。あなたの心にも私を赦す思いがありますか？」と言って、手を差し出した。

突然のことで、ブームはおののき、何もできなかった。そこで彼女は心の中で祈った。「主イエス様。私は、自分の力ではこの人を赦すことができません。どうかこの人を赦す力を与えて下さい。」彼女はゆっくりと手を伸ばし、彼の手を握った。

後日彼女はこう書いている。「その瞬間に信じられないことが起こりました。わたしの肩から腕、そして手のひらを通して何か彼に流れていったのです。それは、私の心から溢れる愛。その愛が私を圧倒しました。」